

## 暖地型牧草の特性に関する研究

(第5報) 生産構造について

大山一夫・佐藤博保

(九州農業試験場)

暖地型牧草60種(約300品種・系統)について特性を調査中であるが、今回は、乾物生産過程を群落構造の面から解析するための手掛りとして、主要草種の生産構造を調査した。

## 1. 試験材料および方法

第3報の方法で栽培した暖地型牧草のうち、第4報の結果、多収を得た草種および特徴のある草種について生産構造を調査した。調査は刈取時期別に出穂期(40~50%の穂が出穂した時期)に行ったが、紙面の都合で、8草種の1番草(バヒアグラスは3番草)のみを示した。

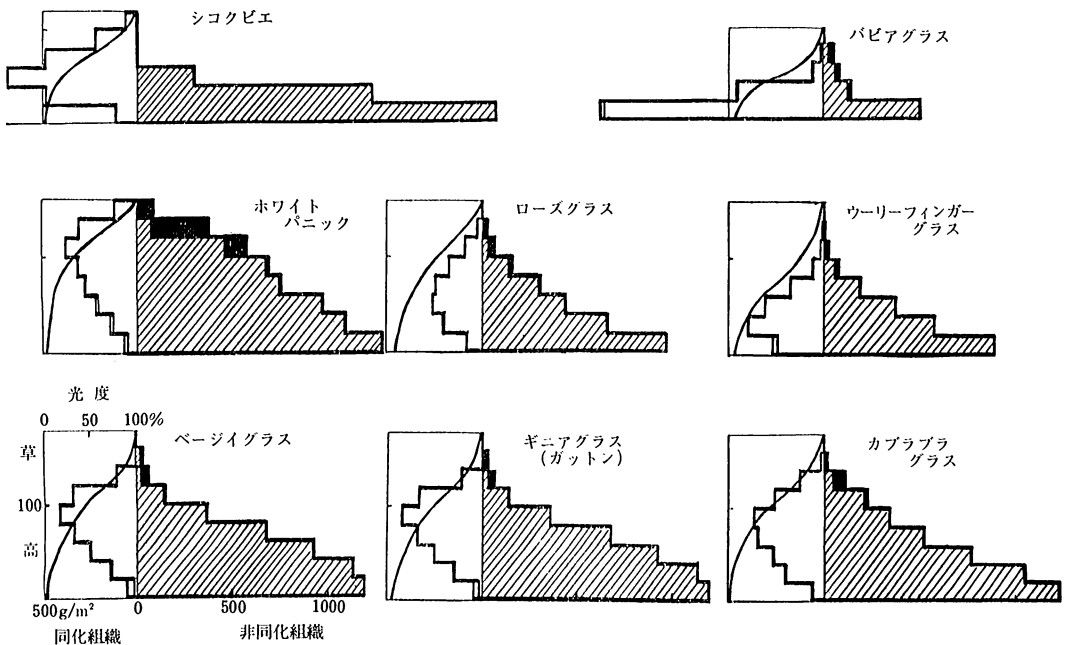
## 2. 試験結果および考察

多収を得たカブラブラグラスについてみると、同化組織が60~120cmに亘って分布し、非同化組織は地際から

離れるに従って減少しており、光合成に必要な光も中層に達していた。これに類似した生産構造をもつものとしてギニアグラスなどがあげられる。

ホワイトパニックは非同化組織の占める割合が高く、同化組織である葉身は上部に多く、うっぺい状態を表しており、反対に、バヒアグラスは同化組織の占める割合が高く、低い位置にあり、光も下層までよく入ることを表しているなどの特徴がみられる。

生産構造は層別の群落の姿を数量的に表したものとすると、好ましい生産構造を具備するとともに、好ましい状態が生育時期、刈取時期などにより変化することが少なく、継続して維持されるような草種の選定なり、栽培法の確立が必要であると思われる。



第1図 生産構造図